寺崎武男の友人

呉 建（くれ けん） 1833-1940 医学博士・画家

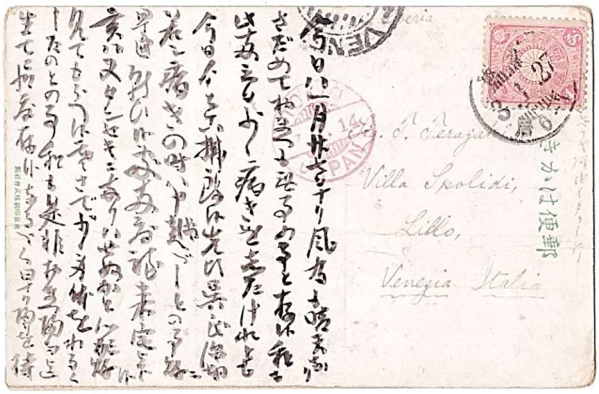
第一高等学校・東京帝国大学医科大学卒業。ドイツ・オーストリアに留学。東京大学助教授・九州大学教授を経て東京大学教授。循環器病学・神経生理学の権威。日本内科学会恩賜賞・服部奉公会賞・帝国学士院恩賜賞を受賞。海外でも高い評価を得て、イタリアのヨリグランオフチアレーロロナイタリア勲二等を受章。何度もノーベル生理学・医学賞の候補となる。洋画にも優れ、帝展・文展に６回入賞。武男とは独逸学協会中学校の同級生。父の呉文聡は統計学の権威であり、武男の父寺崎遜と友人であった。

呉建は、寺崎武男の母セツのもとをたびたび訪問し、母親の様子を武男に伝えていた。「相談事があれば、私に代わり呉氏がしてくれる」と母セツ宛のハガキに記し、友人の手を借りながら、離れて暮らす母を気遣っていた。セツは横文字が書けず、呉建や平井武雄などに武男宛ハガキの表書きを書いてもらっていたようである。

＜1914(T3).1.27＞ No.15

母・寺崎セツ（赤阪）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…ここ数日病気をしたが、今日から床払い。呉氏が親切にも、もし病気の時は申し出るようにとの事だったで、早速お願いし、来宅してくれた。実はまた胆石になりはしないかと心配して見てもらったが、寒さで少し体を悪くしたようだ。おまえが帰るまで、生きていたい、なるべく早く帰りを待っている。」



＜1914(T3).3.24＞ No.22

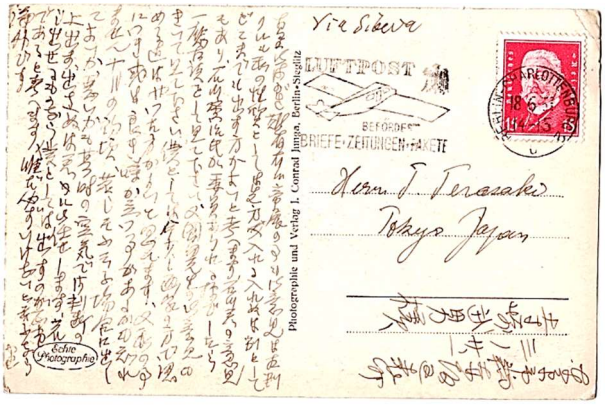
呉建（?）→ 寺崎武男（ヴェネチア）

「…先日の御母堂御病気は、病気という程の事ではないので、御安心ください…」

＜1916(T5).11.14＞ No.24

呉建（?）→ 寺崎武男（ヴェネチア、転送で赤阪）

「…先日手紙に同封の銅版画上出来で感心。…戦時中の御帰朝も困難と考え…ご母堂に事情を申した。帰朝時はカンバスなど荷物も多く、戦争の終わるまで待った方がよいと伝えたが、母堂はお待ちかねの様子…」



＜日付不明＞ No.27

呉建（?） → 寺崎武男（赤阪）

「…又、私の事につき或は良き噂が立つ事があるかも知れません、・・十月の初頃、若しそういう場合に出してよいか、悪いかも、其時の空気で御判断の上出す、出さぬは君のに御任せします、若し出せるものなら僕としては出すのが正当であると考へます、・・唯だ必ずいけないと云ふなら論外です…」

ノーベル賞候補の吉報予告